

# 文化による地方創生 -関西からの展望

～文化庁の関西・京都への全面的な移転を見据えて～

主催：京都府、京都市、京都商工会議所  
協力：文化庁地域文化創生本部、関西・大阪 21 世紀協会  
(2017 年 11 月 2 日 / 大阪市中央公会堂)

関西には、歴史に裏打ちされた  
伝統文化・芸能・祭礼が数多く存在する。  
文化庁の関西移転を契機に、  
文化で日本を元気にするため、  
関西が果たす役割や魅力などを語り合った。



主催者挨拶(ビデオメッセージ)



## 文化で日本を元気に

京都市長 門川大作氏

関西の皆さんのご理解とご支援により、文化庁の全面的な移転が決定し、その喜びと同時に、関西は大きな責任を担いました。関西の強みである文化により、北海道から沖縄まで日本中を元気にするために共に頑張りたいと思います。関西が元気になり、大阪万博の誘致を成功させ、日本の中で関西が大きな役割を果たし、東京一極集中を是正していくことが極めて重要です。

2017年6月に国会で「文化芸術基本法」が公布・施行されました。この法律は、全会一致で決まったため、マスコミであまり報道されることはありませんでしたが、素晴らしい法律です。

今回、関西・京都に移転する文化庁は、「新・文化庁」です。例えば、今までの文化庁は、食文化を扱いませんでした。この「文化芸術基本法」では、日本人が大事にしてきた生活文化についても振興を図り、その例示の一つとして食文化が明記されました。関西が日本の文化をさらに発展させ、より一層、世界から尊敬されるために、文化と経済、文化と観光を融合する取り組みを共に進めて参ります。



2017年は二条城で大政奉還が行われてから150年が経ちました。また、2018年は明治維新150年という節目の年です。明治維新によって、すべての政府機関は東京に集中し、以来150年たつて、初めての中央省庁の移転です。政府のご英断に敬意を表すと同時に、文化庁の関西・京都への全面的移転を何としても成功させ、さらに中小企業庁の大阪移転もしっかりと展望していかなければなりません。

人口減少社会がいよいよやってきました。日本の都市の半分が消滅し、東京一極集中がますます加速され、このままでは日本の未来はありません。関西が先頭を切って、日本中を生き生きさせる。人口減少に歯止めを掛ける。そんな責務を関西が果たしていきたい。

本日は文化庁地域文化創生本部の松坂浩史事務局長のご講演をはじめ、関西・大阪21世紀協会の佐々木洋三専務理事や素晴らしい方々のシンポジウムが開催されるとあって、本当に心強い限りです。

結びに、ご参加の皆さんに心からお礼を申し上げ、皆さんと共に文化で日本を元気にする取り組みを進めて参ります。どうぞ、よろしくお願ひします。

# 文化庁の京都移転と 地域文化創生本部の活動

文部科学省 大臣官房付  
文化庁地域文化創生本部 事務局長

松坂浩史氏



## 新たな文化行政を関西から

文化庁の京都移転について、いつから、どこに、何が、という視点でお話ししましょう。移転時期ですが、まず平成29(2017)年4月、文化庁は京都市東山区に「地域文化創生本部」を設置し、遅くとも2021年までに京都へ全面移転。人員規模は文化庁職員全体の7割にあたる250名程度で、長官や次長などの幹部も基本的に京都で仕事をします。

移転場所は、京都府庁敷地内にある京都府警察本部の本館を予定。これは昭和2(1927)年に建てられた歴史的な建物で、文化庁本庁舎にふさわしい重厚な歴史を感じさせる建物です。



文化庁移転予定の京都府警察本部本館

「何が、移転されるのか?、現在の東京の業務を単に京都に持ってくるわけではありません。文化庁の主な業務は、「芸術文化の振興」、「国立文化施設の運営」、「文化財の保存と活用」です。芸術文化の振興とは、日本舞踊、オーケストラなどの西洋音楽の普及、映画製作の支援や海外発信、国民文化祭の実施などです。国立文化施設とは、大阪の「国立国際美術館」や「京都国立近代美術館」、「国立文楽劇場」、沖縄の琉球舞踊の「国立劇場おきなわ」などです。文化財の保存と活用は、建造物や茶器、甲冑などの有形文化財や、歌舞伎や能楽などの無形文化財、青森ねぶた祭のような民俗文化財など、日本各地の文化財を調査、ちなみに国宝の建造物は東京には二つしかありませんが、京都や大阪にはたくさんあり、それらを活用して、関西から日本の文化をアピールすることも可能です。日本文化が重層的に存在する関西ならではの文化行政を展開することは、日本全体にとって大きなメリットがあるのです。文化庁は平成30(2018)年に創設50周年を迎えますが、こうしたことを踏まえ、関西で新しい仕事を展開しようと考えています。

## 食文化に対する施策も展開

文化庁は平成27(2015)年度より地域の歴史的な魅力や特色を通じて日本の文化・伝統を語る「ストーリー」を「日本遺産(Japan Heritage)」として認定しています。有形・無形のさまざまな文化財を地域が主体となって総合的に整備・活用し、国内外へ戦略的に発信することで地域の活性化を図ります。観光客

に、ただ現地の文化財を見学するだけではなく、そこで物を買ったり食事をするを含めて、総合的に地域の文化を楽しんでいただくとするものです。

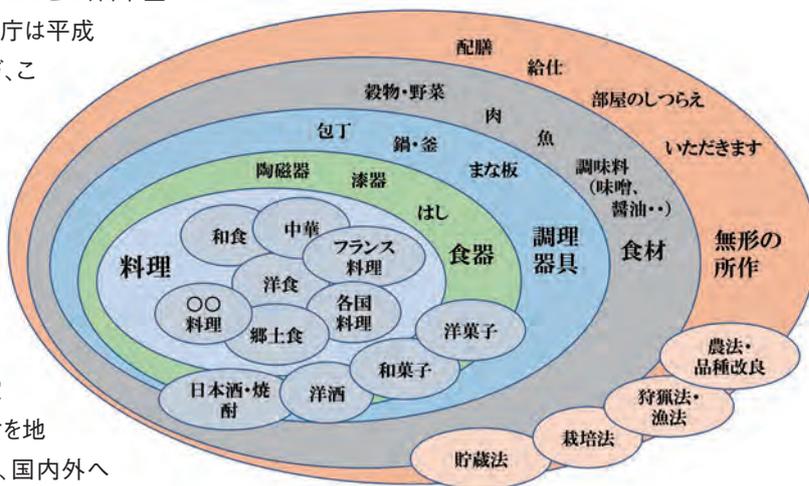
また、平成29(2017)年6月、これまでの文化芸術振興基本法が改正されて、「文化芸術基本法」が公布・施行されました。ここで注目すべきは、同法で例示された生活文化の中に、旧法の茶道や華道、書道に加え、新たに「食文化」が追加されたことです。移転後、文化庁は食文化への取り組みも始めます。

皆さんご存知の通り、ユネスコ世界無形文化遺産に登録された和食は、季節や風土、生活に即した大切な日本文化です。料理や食材だけでなく、酒や菓子なども含み、味噌や醤油などの発酵調味料、椀や皿などの食器、包丁や鍋などの調理器具、さらには配膳や食事の所作、給仕する側のおもてなしの心に至るまで、数多くの有形・無形の文化で構成されている。こうした分野について、これまで文化庁は十分に対応してきませんでした。移転後は、こうした食文化に対する施策も展開します。それが冒頭申し上げた「東京の文化庁がそのまま関西にやってくるわけではない」ということです。私も関西の食文化を含めさまざまな文化を吸収し、それを全国に展開することで、「文化庁を関西に移転してよかった」と日本中から思ってもらえるよう取り組んで参ります。皆さまの応援をよろしくお願いいたします。



日本遺産の  
ロゴマーク

## 生活文化(食文化)に対する施策の展開



(画像提供:文化庁)



# 文化による地方創生-関西からの展望

関西の文化について、「強みと課題」、「総合力を発揮する広域連携」、「関西から日本を元気にする具体的提案」という視点から、各界でご活躍のリーダーによる活発な議論が展開された。



コーディネーター  
**佐々木洋三**  
公益財団法人  
関西・大阪21世紀協会  
専務理事



**奥野卓司氏**  
関西学院大学社会学部教授、公益財団法人山階鳥類研究所所長



**杉本節子氏**  
公益財団法人奈良屋記念杉本家保存会常務理事兼事務局長、料理研究家、エッセイスト



**角 和夫氏**  
阪急阪神ホールディングス株式会社代表取締役会長グループCEO、阪急電鉄株式会社代表取締役会長、公益社団法人関西経済連合会副会長、一般財団法人関西観光本部副理事長



**高島幸次氏**  
大阪大学招聘教授、大阪天満宮文化研究所研究員

(50音順)

## 関西の個性と魅力

**佐々木** 2005年、関西広域連携協議会(関西広域連合の前身)が文化庁関西拠点の設置要望書をまとめ、関西の自治体や経済団体の合意を得て政府に上申しました。当時、私もその仕事に携わっていました。以来12年、経済団体も東京一極集中の是正を強く提言してきましたが、一極集中はますます進み、一方で経済格差の拡大、ポピュリズムの増大など、社会不安は膨れ上がるばかりです。

そうした中で文化庁の京都移転は、文化や経済の東京集中を是正し、地域の文化力や創造性を育てて活力ある社会を実現する千載一遇のチャンスです。とはいえ、今度は文化の「京都一極集中」になっては意味がありません。今こそ関西の多様性を活かし、国際交流や海外発信の新たなモデルを関西の総力をあげて考え、行動するときです。まずは「関西の文化の強みとその課題」について、食や伝統文化など、関西の個性について論じたいと思います。奥野さんからお願いします。

**奥野** 東京は今、江戸文化ブームに沸いています。とはいえ江戸は武家社会で、当時文化が盛んだったのは上方、浮世絵や歌舞伎は上方で発祥したものです。また、最近「東京・名古屋・大阪」を指して「三都物語」という言い方をしますが、「三都」というなら京都を入れるべきです。関西というエリアでいえば三都は京阪神であり、そこで育まれた町衆の文化に瀬戸内のグローバル性が加わり、江戸へと伝播したのです。

**佐々木** 「瀬戸内のグローバル性」とはどういうことですか。

**奥野** 例えば、本シンポジウムのパンフにもある伊藤若冲が描いた鶏の絵を動物学的に分析した結果、羽毛の配色などから海外の鶏との交雑種であることが分かりました。南方産の鶏が琉球を介して薩摩に入り、さらに北前船で瀬戸内を通過して大坂、そして京都へ入ってきたものだと考えられます。大坂には豪商で本草学\*にも精通した木村蒹葭堂がいて、そのネットワークを介してさまざまな文物が集められ、ときには商売



伊藤若冲「向日葵雄鶏図」

に結びつけることもありました。つまり瀬戸内は、世界と関西そして日本各地をつなぐグローバルな海路だったのです。

\*本草学…江戸時代の植物学で、薬用の観点から植物、動物、鉱物などの自然物を研究する学問。

**高島** 「三都」とは、もともとは江戸時代の「京都・大坂・江戸」を指す言葉でしたから、「東京・名古屋・大阪」も「京阪神」もそのパロディです。時代によって変わるんですね。それはさておき、奥野さんがおっしゃった木村蒹葭堂のような旦那衆の存在はとても大事で、阪急電鉄を興した小林一三に代表されるように、政治的にも経済的にも文化的にも、関西の旦那衆が果たした功績は大きかった。大阪の割烹も、京料理も、旦那衆によって育まれたという一面があります。

## 「ハレ」を楽しむ旦那衆

**佐々木** 関西の料理文化については後ほど議論していただくとして、杉本さんは、京町家「杉本家住宅」の保存活動に取り組んでおられますね。

**杉本** 私は、築150年の「杉本家住宅」の維持・保存活動をしています。当家は寛保3(1743)年に呉服商を創業し、京都市中に店を構えました。創業当時の建物は蛤御門の変のあった元治元(1864)年に被災して焼け落ち、明治3(1870)年に再建したのが現在の建物で、重要文化財に指定されています。

1841年の天保の改革で、京都の商人はそのお触れに従って質素儉約に努めました。当家には『歳中覚』という備忘録が残されていますが、この年に書き改められ、「朝夕の食事は茶漬けに香の物、昼は一汁一菜」と記されています。ちなみ



杉本家住宅外観

に杉本家では、桃山大根という伝統野菜を漬物にしてお茶漬けと一緒にいただく当時の食習慣が今でも残されています。商家の旦那衆は日々の生活は質素でしたが、祇園祭になると懸装品(山鉦を装飾する絢爛豪華な幕地)などにお金をつぎ込んで、「ハレ」の日を楽しんだことが分かります。

**佐々木** 高島さんは天神祭を応援されていますが、祭りという観点で関西の文化をどのように見ておられるでしょうか。

**高島** 天神祭の船渡御は、100艘ほどの船が大川に繰り出します。人数にして約1万人。それを橋の上などから130万人もの観客が見物し、船上と川岸や橋上の群衆が賑やかに「大阪締め」という手締めを交わします。私はそれが当たり前だと思っていて、祇園祭に山鉦の人に向かって声を掛けたら全く無反応です。文化は地域によって異なるもので、普



祇園祭山鉦  
(写真提供:杉本節子氏)

遍性を持たないということに気づきました。「関西の文化」とおっしゃいましたが、関西に普遍的な一つの文化はありません。関西を活性化するために、行政や財界が一つにまとまって何かしようということは大賛成なのですが、関西に一つの普遍的な文化があるように錯覚してはいけないと思います。

**佐々木** 祭りひとつ取っても地域の文化は異なります。奥野さん、いかがですか。

**奥野** 関西地方では、元々は京都と畿内の摂津などの文化がネットワークされて、地域の文化が育まれてきました。私はそうした多様性やネットワークを大事にすべきだと思います。

**佐々木** 角さんは、企業として文化によるまちづくりを行ってこられました。

## 都市格を高める企業戦略

**角** 阪急電鉄は1910年に開業しました。当時、田畑ばかりだった宝塚線沿線で民間鉄道初の住宅開発を行い、日本初の住宅の割賦(ローン)販売を行いました。昼間の乗客を増やすため「宝塚新温泉」を開業、1914年には「宝塚少女歌劇」の第1回公演を行い、10年後の1924年には、4000人収容の「宝塚大劇場」をオープン、観劇料が高額な歌舞伎に対し、低廉で家族で楽しめる娯楽を提供しました。創業者の小林一三は、「一都市一美術館」を提唱し、池田市に逸翁美術館や演劇・文芸に関する蔵書を集めた池田文庫をつくりました。近年では、西宮球場の跡地に大型商業施設の「阪急西宮ガーデンズ」を開業し、兵庫県立芸術文化センターを誘致したことで、西宮の文化都市としての格が上がり、2017年の「住んでみたい街アンケート・関西版」で、西宮北口が1位にランクされました。

**佐々木** 兵庫県立芸術文化センターの建設にあたっては、阪急電鉄さんのご協力も大きかったと伺っています。

**角** 阪神・淡路大震災の10年後にあたる2005年、兵庫県が「復旧」ではなく「復興」という強い気持ちで建設に臨まれました。当社所有の土地ですが、その賃料をかなり格安にさせていただくという形で協力しています。

**高島** 角さんの会社が文化にすごく力を入れておられるのは、私も実感しています。惜しむらくは、どうして阪急ブレイブを手放されたのかと…(笑)。

**角** 民間企業は、収支の成り立たない文化活動を継続することはできません。以前は宝塚歌劇、宝塚ファミリーランド、阪急ブレイブがそれぞれ毎年10億円ずつ、合計30億円もの赤字でした。こんな状態では株主のご理解が得られません。宝塚歌劇だけを残しましたが、現在はきちんと利益を出しています。

**奥野** 昔は、経営者でありオーナーである旦那衆の裁量だけで文化活動の支援ができましたが、現代のように株式会社やホールディングス(持株会社)になってしまうと、トップの思いだけではお金を使えません。企業が文化を支援しにくい時代になったと感じます。

**佐々木** 旦那衆が少なくなると、町衆が行う文化活動やま

ちおこしの資金集めはとて厳しくなりました。あの天神祭も資金繰りに苦労しています。まちおこしのための浄財を集めることは一番の課題です。杉本さんもそうしたご苦労がおりなのでは？

**杉本** 2017年の祇園祭は、公益財団法人山鉦連合会が初めてクラウドファンディング\*で運営費用の一部を賄いました。京都の伝統文化を後世に伝えるためには、これも一つの方法です。

\*クラウドファンディング…インターネットを介して不特定多数の人から資金を集めること。

**奥野** 「京都」というブランドがあるからこそ、浄財が集まるのでしょ。大阪でもそうしたブランド価値を高めなくてはなりません。京都はブランド価値を高めるために行政も企業もお金を使ってるし、努力もしています。それが産業や経済の活性化につながっていくのです。今の大阪は文化にちゃんとお金を出しているのでしょうか？それが気に掛かります。



阪急西宮ガーデンズ(阪急電鉄提供)

## 文化発信のキラーコンテンツ「和食」

**佐々木** 関西各都市が持つ個性ある文化の強み、課題についてお話を伺ってきました。また、さきほど、奥野さんからネットワークのお話もありました。次に関西各地域の文化の総合力発揮と広域ネットワークについて議論を進めたいと思います。角さんは観光集客のポテンシャルが高い関西で、広域周遊のご提案をされていますね。

**角** 2016年の訪日外国人数は2,400万人を超えましたが、この数字は関西が大きく貢献しています。関西の自治体は以前に比べて、様々な形で連携ができてきたと思います。さらに広域周遊を可能にするには、阪神高速道路神戸線の混雑解消や、淀川左岸線の整備が必要ですが、交通インフラも以前より整ってきています。

**佐々木** 訪日外国人の楽しみの一つに和食があります。和食は美味しく健康に良いと世界の注目を集め、ユネスコ世界無形文化遺産に登録された日本の文化です。杉本さんは料理研究者として関西の和食を発信していらっしゃいますね。

**杉本** 和食の最大の特徴は「出汁」です。出汁を美味しく感じるのは「うま味」という成分があるからで、うま味を意識するのは日本人特有です。糖分や塩分、脂肪分も美味しさの成分ですが、摂りすぎは健康に良くありません。その点、和食は

低カロリーなのに「うま味」によって美味さを感じるから、注目されているのです。出汁は昆布なしに成り立ちません。昆布は江戸時代、北海道から北前船で大坂に持ち込まれ、京都に運ばれました。京料理というのは大阪の港や都市機能、食文化なしにありえなかったのです。

**佐々木** 昆布を運んだ北前船のお話がありましたが、2017年4月28日に「北前船寄港地」が日本遺産として、まず函館から敦賀まで認定されました。2018年には敦賀から大阪までの認定を目指しています。北前船は昆布の他にもニシンカス運び、河内や倉敷で綿業を発展させました。包丁に使われる出雲玉鋼を流通させたのも北前船です。このネットワークをうまくストーリーにして世界の人々の健康と長寿に貢献する和食文化を発信していくことも大切です。

**奥野** 瀬戸内は北前船の航路であり、豊かな漁場です。瀬戸内には「アビ漁」といって、アビという鳥が海に潜り、追い込んだイカナゴを追って海底から上がってきたタイヤスズキを竿で釣るという独特の漁法がありました。そうした豊かな恵みが船場の食文化を育てました。また、食材だけではなく、人や文化が大坂や京都などへ運ばれ、瀬戸内文化圏を形成しました。逆に、京都から大坂に人が来る例もありました。18世紀末頃、今の大阪造幣局あたりに「孔雀茶屋」という鳥や動物を見せる茶屋があり、見物客が宇治や伏見から淀川を船で下って大坂にやって来ました。戦後、アマチュア無線家の遊びをデパートが取り入れ、それを旦那衆が支援して日本初の放送局、毎日放送が誕生したのです。関西にはこうした食や遊びを楽しむネットワークが昔からあり、現代にいたって宝塚歌劇や通天閣など、京阪神ネットワークの中で産業化されていきました。

**佐々木** 遊びの文化を産業化していく力が京阪神の強みだったのですね。

## 「観風」対策と「コト消費」

**高島** 「観光」に加えて「観風」も重視すべきだと考えています。観光とは、風景や建物などを観ることで、観風というのは、その地域で暮らす人々の生活・風土を知り、感じることです。しかし現在、観光パンフレットはたくさんあっても、日本の生活文化を知ってもらうための「観風パンフレット」はありません。以前、外国人留学生と一緒にうどんを食べたとき、私が音をたててすすろのを見た留学生から「とても下品だ」と言われたことがありました。こうした誤解を受けるのは、観風を知ってもらう努力をしてないからです。日本人も日本の文化や習慣を知らない外国人を嫌うことになります。文化の産業化にあたっては、この観風の視点を持たなければなりません。

**角** おっしゃるとおり、インバウンドはリピーターも増えています。国内・国外問わず、お客様は買い物や食事といった「モノ消費」から、日本の文化を楽しむ「コト消費」へと変化しています。こうした風を先取りし、2008年に開業した西宮ガーデンズでは、まずお越しいただき、散策して頂けるようにと、ペト

専用のエレベーターやベットの幼稚園を設け、そこでしつけを学んだら卒園証を渡したり、ベットの帽子を被せ、卒業写真を撮ったりする等の仕掛けをし、好評を得ています。さらに、今後インバウンド向けに「コト消費」として力を注ぎたいのが「ナイトカルチャー」です。

**高島** あるカナダ人が大阪の民宿に泊まって、出がけに「いきます」と挨拶したら「はよ、お帰り」といわれて戸惑ったといいます。「どうして早く帰らなければならないのか」と返したら、「無事にお帰りください」という意味だと教えられ、これが一番の土産話になったと。大事なものは「はよ、お帰り」というのが大阪の文化ということです。関西の人にはそういう温かな気遣いがあるという観風を知って感動したという例です。「いただきます」「ごちそうさま」というのは日本人特有の食事作法ですが、それに対して「よろしゅう、お上がり」「お粗末さまでした」と応える文化があることを説明するのが大事なのです。

**奥野** 高島先生のおっしゃるとおりですが、ちょっと心配なのは外国人に対する説明だけでなく、われわれの内なるところからかなり蝕まれているのではないかとということです。大阪でも京都でも、昔からごく当たり前に行ってきたことが、今も行われているとは限りません。私たちが培ってきた生活文化が失われつつあることが問題です。

**佐々木** 確かに、ユネスコ世界無形文化遺産に和食が登録されたのは家庭料理が評価されたからですが、主婦も勤める時代に、出汁を引く時間がなかったり、お箸を使えない子供達が増えたりなど、和食の作法も崩れつつあります。文化芸術基本法では食文化も対象となりましたが、杉本さんはその辺をどうぞ覧になられますか？

**杉本** 現在、「日本遺産」に認定されているものは全部で54件ありますが、そのうち「食」がテーマのものは三つだけです。福井県若狭と京都をつなぐ「鯖(さば)街道」、京都府の「日本茶800年の歴史散歩」、そして、和歌山県湯浅町の「醤油醸造の発祥の地」です。とくに「御食国(みけつくに)」と呼ばれた関西の食文化は私たちの誇りであり、そうしたことをストーリーにして海外から来る方々にも肌身で感じられるよう広く発信していきたいですね。

**佐々木** 御食国というのは、古代、天皇に魚介類を献上することを許された国のことで、越前(若狭)、鳥羽(伊勢)、淡路(大阪湾)を指し、また、若狭の小浜は日本の鮭の発祥地といわれています。こうした和食文化をきちんと伝える食育も大切です。一方、カリフォルニアロール鮭やラーメンは和食なのでしょうか。例えば、「鯖ラーメン」のように伝統ある関西の和食文化の上に新たな価値を創造し、杉本さんのおっしゃるように過去から未来に物語をつないでいくことも必要です。

## 2020年に向けた課題 ～アームズ・レングス～

**佐々木** 2020年東京オリンピック・パラリンピックに向けて、今、国をあげて文化プログラムが推進されています。これ

について角さんにお伺いします。

**角** オリンピック憲章にはスポーツと併せて文化プログラムの実施が明記されています。2012年のロンドン大会では、過去には見られないほど大規模かつ多彩な文化プログラムが実施され、成功を収めました。2020年以降も日本各地で文化プログラムが実施されることを期待しています。とはいえ日本の文化予算は1,040億円(2016年度)しかなく、フランス(4,238億円)、韓国(2,525億円)、アメリカ(1,659億円)など諸外国に比べてあまりに少ない。国家予算に占める割合も韓国(1.09%)やフランス(0.89%)などに比べて日本は0.1%という低さです。

また、文化庁の補助金(文化芸術振興関連補助金)を都道府県別に見ると大きなばらつきがあり、新潟県や京都府は突出していますが、大阪は極めて低い。今後は文化予算を増やすことと併せ、官民が協働して文化事業を進める努力が必要です。兵庫県立芸術文化センターの開館で西宮市の文化都市としての格が上がったように、そうした努力によって、地域の文化的ポテンシャルが上がり、人が集まり、活性化の機運も高まります。

**佐々木** 文化庁の補助金が都道府県によってばらつきがあるのは、自治体によって申請額が異なるためです。補助金は事業費の2分の1なので、半分は自治体が負担しなくてはならず、また、自治体によっては文化を地域の活性化のツールとして戦略的に捉えていないこともあります。

**奥野** 政府は日本文化の魅力を発信する「クールジャパン戦略」に取り組んでいますが、これはイギリスの国家戦略「クールブリタニカ」に倣ったものです。クールブリタニカの良いところは、行政は企業やNPOなどに経済的支援はするが、活動内容には口を出さないという点です。経済学者ケインズが提唱した「アームズ・レングス」はこの口出ししないという意味です。ヒトラーが文化の祭典であるベルリンオリンピックを政治に利用したことへの反省でした。こうしてイギリスは、歴史と文化の特徴を活かしつつ新しい文化を生み出し、活性化につなげています。

また、スコットランドのエディンバラフェスティバルでは、歴史あるエディンバラ城を活かしながら、新たな芸術・文化を生み出す祭典を行い、世界中から集客しています。こうした施策は、長い歴史と多彩な文化を持つ関西にこそふさわしいと思います。大阪にも大阪城があるのですから、これを活用したフェスティバルができるのではないのでしょうか。

## 関西から日本を元気にするために

**佐々木** それでは、文化庁の関西移転を機に、関西から日本を元気にする具体的な提案をお伺いします。

**高島** 先ほどの話の繰り返しになりますが、観光より観風のほうがより文化への接触度が大きいと思いますので、これからは観風を説明する努力を課題にしたらいと思います。役所の「観光局」や「観光部」を、すべて「観光・観風局」に改

## 文化による地方創生-関西からの展望

名して、文化を理解してもらうことに重点を置く。経済効果だけを考えたインバウンドに期待するのは、よくないと思います。観光の「光」と観光の「風」の両方が満たされて、「風光明媚」になります。関西は、風光明媚でありたいですね。

**杉本** 関西からキラーコンテンツである和食文化を発信していくためには、「国際関西和食フォーラム」(仮称)というような産官学や京阪神で和食をきちんと論じ合うプラットフォームづくりが必要だと思います。京都府立大学では「京都和食文化研究センター」が開設され、和食文化学科開設の準備が進められているように、和食の効能をアカデミックに検証し、その価値をさらに高めることも大事でしょう。そうした成果に基づき、関西の和食をそれぞれの地域が物語にしていって取り組みに力を注ぎたいと思います。

**角** 2020年の東京オリンピック・パラリンピックを挟んで、2019年にラグビーワールドカップ、2021年にワールドマスターズゲームズ関西が開催されます。この「ゴールデン・スポーツイヤーズ」に加え、2021年には大阪で食博があり、さらに大阪万博が誘致されれば2025年は食博と万博のダブル開催の年となり、関西の食や文化を世界に発信する絶好の機会になります。

一方、文化を守り、振興するためにネックになるのはお金です。私は囲碁好きなのですが、スポンサーの減少で日本での国際棋戦は皆無です。そこで企業に協力を取り付け、2017年3月に優勝賞金3,000万円で日中韓とAIの4者による国際棋戦を実現させました。関西フィルハーモニー管弦楽団も民間の支援で活動を維持しています。インバウンド関連では、大阪府が宿泊税を導入、京都市でも民泊に宿泊税を導入する方向です。違法民泊取り締まりの効果もあり、私はこの政策に賛成で、さらに関西広域連合の各自治体が宿泊税を導入し、例えば税収の一部を関西全体の文化、観光施策の財源に充ててはどうかと提案しています。

\*ワールドマスターズゲームズ関西…概ね30歳以上のスポーツ愛好者であれば、誰もが参加できる生涯スポーツの国際総合競技大会。

**奥野** 関西は、今日のグローバル経済と違って近江商人の「三方よし」の考え方のように「まず、やりましょう」と、民が中心となって、近江や京都、大阪などそれぞれの地域で、それぞれの方法で始めたのです。だから、多彩な文化が関西各地で花開きました。文化庁が移転しても、われわれ民間がちゃんとやっていくという意味を持たなければいけない。行政は支援するだけにとどめて、産業界、クリエイター、学問的な専門家、NPOやNGOの人々、そして市民一人ひとりが頑張らなければなりません。

また、関西には京都、大阪、神戸、奈良、滋賀など各地域で独特の歴史・文化に根ざした「物語」があります。その物語を展開していくと、もの凄くオモロイことになります。その周辺で食をはじめ、水路を使ったさまざまなイベントもできる。大阪城や京都御所などの歴史の舞台に、上方文化をベースに近未来指向の物語を上演するイベントがあっても面白い。そ



れを関西の観光、情報、文化、飲食産業などから日本のモノづくり産業にまでに波及させる、「物語づくり」を「モノづくり」に結び付けていくことで活性化につながると思います。私たち町衆がそれを活性化させていかないとアカンと思います。すぐにリターンを求めないで、結果的に関西のさまざまな分野で産業を活性化させるという長期的な見通しで、それこそ昔の旦那衆のようにやっていくべきです。

**佐々木** 先ほどは奥野さんから、エディンバラフェスティバルのように大阪城を活用すればどうかというご提案がありました。関西・大阪21世紀協会は、大阪城や堀、市内の河川という既存の歴史的なインフラを活かした舞台をつくり、オペラや吹奏楽などさまざまな舞台芸術の可能性を探る社会実験を行ってきました。締め括りにその動画をご覧いただきたいと思います。大阪城をバックにタクトを振った関西フィルハーモニー管弦楽団の首席指揮者の藤岡幸夫氏は「世界各地の舞台でタクトを振ったが、ライトアップされた大阪城をバックにこんな素晴らしいステージはない。なぜ、大阪はこれを売り出さないのか?」と語っていました。

最後になりますが、文化庁の関西移転で求められるのは、地域の多様な歴史・文化を発信し、国際文化交流を推進する機能を関西が果たすことではないでしょうか。関西には国宝の約6割、日本の世界文化遺産の半数とその維持に従事する多くの人材が集中しています。今こそ、文化庁が何かをしてくれるのを期待するのではなく、私たち自身が自ら行動するときにあると思います。本日はありがとうございました。



大阪城西の丸ステージウィーク (2012年7月・西の丸庭園特設ステージ)